［別紙２］

論文審査の結果の要旨

申請者氏名　松本　精一

わが国の農業は水田農業を主体としてきたため，農業技術は稲作技術を中心とした土地節約的な性格で発展してきた。稲作の生産力は，地域的格差を伴いながら，いくつかの上昇期と停滞期という局面をみせて発展してきた。このため，稲作の収量の動向を見る場合には，地域格差と生産力発展の局面をふまえた検討が必要である。

本研究は，地域稲作の発展過程に関する研究の中で，山梨県高根町小池地区に残る約200年間の『坪刈帳』を基礎資料として，坪刈帳の記録内容，農家差出文章，統計資料等から過去約200年間にわたる稲作生産力が変革していく過程を，土地改良を含む農業技術面から検討し，稲作の発展過程を跡づけ実証し，理論の展開を行なったものである。

序章における研究の背景，目的及び既往の研究に続き，第１章では，山梨県における稲作の歴史的な変遷を分析している。山梨県の水田面積は，戦後一貫して低減している中，八ヶ岳南麓町村が面積を維持し，また，これら町村が高い稲作単収をあげていることを示し，わが国における高収量地帯が北進したのと同様に山梨県においては高標高地域への山登り現象があることを明らかにした。

第２章では，山梨県高根町及び小池地区における稲作の歴史的な変遷を分析している。高根町農地の開発は，標高800m以下の旧村が江戸初期，900mの旧村が江戸末期～明治時代，1,000mの旧村が大正時代～昭和戦後期に行われ，稲作の高標高地域への展開時期を示した。また，小池地区の水田は，明治以降２回の暗渠排水，１回の圃場整備が行われたこと，地区の農業経営は江戸期～明治中期が水稲と雑穀，明治中期～昭和40年代が水稲と養蚕，昭和50年代以降が水稲であったことを示した。

第３章では，小池地区に残る坪刈帳の内容を紹介している。この坪刈は，文化６年(1809)～明治９年は上・中・下毛(稲)の作柄調査，明治10年以降は１等田～７等田の地位調査で，その内容は，１坪籾収量，品種，１坪株数，１升籾重量等である。坪刈は，江戸時代における年貢納入方式による領主と村との関連で村請年貢の破免検見の目的で行われ，地租改正～農地改革は地主と小作人間における小作料の納入算定を目的として行われ，その後は作柄調査であることを示した。

第４章では，坪刈帳の内容を分析整理している。１坪籾収量が江戸末期の1.2升水準から現在の2.4升に上昇してきた局面を，２回の急上昇期をもつ４段階の生産水準で推移してき

たことを示している。この局面は第１段階が江戸末期～明治時代，第２段階が大正時代～昭和戦後期，第３段階が昭和25年～昭和50年代，第４段階が昭和60年以降としている。また，１坪籾収量と高根町の単収との比較により，坪刈資料の有意性を示した。さらに品種の導入時期と収量の関連では，常に多収量品種を導入し，地域の農業技術の発展とあいまった適地適作(籾)の原則が守られていたことを明らかにした。

第５章では，収量に及ぼした個別稲作技術の推移をみると，肥料では明治期までは刈敷・堆厩肥，大正期に硫安・カリ肥料の使用，昭和30年代に化学肥料に転換，農作業では昭和30年代までは馬耕(後牛耕)・人力，昭和40年代以降の農業機械化の進展，圃場整備後の中型農業機械の普及，また，昭和28年冷害を契機に保温折衷苗代が普及したことを示した。さらに，上・中・下田毎の1坪籾収量と圃場条件との関連を調査し，大正前期と昭和30年代前半の暗渠排水は，中田の収量を上げたこと，昭和50年代の圃場整備は下田の収量を上げたことを確認し，戦後期を通じて収量が急増した背景には営農技術の進歩があるが，各等田がもつ土地条件による固有生産性は，圃場整備で均質化されたことを明らかにした。

以上のように，本研究は，地域稲作の発展過程について，その２００年にわたる坪刈帳により稲作生産力が変革していく過程を，品種，土地改良等の農業技術面から整理し，跡づけ実証し，理論の展開を行い，これまで研究の少なかった中山間地稲作の長期的な発展過程について検討したものであり，学術上，応用上貢献するところが少なくない。よって，審査委員一同は，本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。